



どうだんつつじ

満天星

第11号 令和3年2月25日



QRコード
智頭小学校ホーム
ページへアクセス

親の背を見て子は育つ

校長 氏橋 俊司

昔、学級担任をしていた頃、年度の終盤が近づいたちょうど2月、校内の他の先生からしばしば言われたことがありました。「先生のクラスの子どもたち、話し方が先生とそっくりになってきたなあ。」と。確かに子どもたちは理屈っぽく話そうとしたり、とにかく短く端的に伝えようとしたりと、まるで自分の姿を言われたようでおかしくなったことを覚えています。

学校では、よく『教育は教師なり』と言われる。このことは、良かれ悪しかれ、担当する教師のふだんからの態度や行動が、子どもの道徳性をはじめとして考え方や立ち振る舞いにまで大きな影響を与えるということです。子どもにとって最大の教材は、まさに教師そのものというわけです。ですから私たち教師はそのことを肝に銘じ、夢や希望を持ち、自分の能力を高めるよう日々精進を重ねる必要があります。しかし一方で、教師も完全な存在ではありません。うまくいかないことも多々あります。そこで、自分自身も児童と一緒に成長していこうという気持ちで過ごすようにしています。

さて、子育てに関わることわざに『親の背を見て子は育つ』という言葉があります。子どもは、親のしていることや言っていることを見て、それが当たり前のことと考え、自分もそのように育っていくという意味です。価値観も含めて、親の姿が子どもに映し出されるというわけです。ご家庭の皆さまも、「おたくのお子さん、親御さんと雰囲気までよく似ていますね。」と親しい方から言われたことが少なからずおありでしょう。

子どもとのつきあい方で、保護者の皆さまからよく耳にすることとして、「つい叱りすぎてしまって・・・」「一方的に自分ばかりが話さないようにと思ってはいるんですが・・・」などがあります。お仕事のこともあり、時間の余裕のなさが、心の余裕のなさになっていると反省の言葉を出される方もあります。また反対に、子どもの成長は子ども自身の問題という考えから、口出しをしないようにしている、子どもに全て任せているという話をされる方もあります。このような声を聞く中で、私は子育てや教育では“塩梅（あんばい）”が大事ではないかと思っています。あまりに大人が干渉的になりすぎると、子どもは受け身となり主体性は育ちません。また、子どもの主体性ばかりを重視すると、社会性や協調性の育ちに無理が出てきます。その場その場で、子どもを押ししたり引いたり、それが周りの大人の役目ではないでしょうか。

昨年秋、学校評価アンケートの中で保護者の皆さまに「ありたい保護者像」を自由に記述していただきました。たくさんの皆さまからご回答をいただき感謝申し上げます。大まかに分類を行い、PTA理事会でもご意見を集約し、支持の多かったものを「ありたい保護者像・めざす保護者像」としてとりまとめました。それが、右に掲げているものです。子どもを見守る保護者としてのスタンスや寄り添い方、そして子どもの人権を尊重することなど、どれも大切なことばかりに感じました。

いよいよ令和3年度に向けた準備段階といえる3月です。あらためて「ありたい保護者像」「ありたい教職員像」を意識し、焦ることなく取り組みたいものです。子どもたちは、その大人の背中を心の眼でしっかりと見ていることと思います。

『ありたい保護者像・めざす保護者像』



①子どもを正しく叱り、ほめ、励ます保護者

【人生の先輩である大人としての関わり方】

②子どもを信頼し、寄り添い、笑顔で支える保護者

【子どもに対する基本的なスタンス】

③子どもの人権を大切にす保護者

【子どもも大切な人権をもつ存在】